

V218c 可視分光器 Alpy600 の試験観測

田邊健茲、安藤和子、山村春香、松井瀬奈、福田尚也（岡山理科大学）

フランス・Shelyak 社の可視分光器 Alpy600 は、分光素子としてグリズムを用いているため、小型で軽量（すべてを含めて約 2kg）でありながら、かつて OAO188 センチメートル望遠鏡に取り付けられ、AGN などの分光観測を行ったいわゆる「新カセ」分光器を凌ぐ性能を持っていると考えられる。その構造ならびに使い方については前回の年会でその概要を報告した。今回はこの分光器を用いて、早期型星、輝線星、惑星状星雲、AGN などのスペクトルを求めてみた。試験的に用いた望遠鏡は Celestron 社の 20 センチメートル Schmidt Cassegrain 望遠鏡で、これに F6.3 となる Focal Reducer(Meade 社) を付けているが、これがないとスリットに焦点を結びにくい。また、使用した赤道儀は Vixen 社の SXD2 で天体の自動導入システムが使える。使用上の問題点としては、監視用 CCD と本体（スペクトル取得用）の CCD とのピントが少しずれているため、スリットへの星の導入には工夫がいる。試験的な観測の結果とともに遠隔操作システムについても発表する予定である。